



雪月卷

下



雪月を集

冬之郊

雪

芭蕉

日枝之工雪意已こせ踏雪の橋
山鷹あそこいつこ此良中心雪支考
此良の雪大津乃弦師の懐 年角呂



夕暮の中りを所や雪乃松竹文
雪の山風りて蒼冢 雪も風一独ト
こ日月の角毛法女種と雪の山素沈
雪此燈の要り足る小池引糸推
口ありし 袖雪ま川や炭 遠海川
初雪乃晴みと霧をかく 雪外一三
初雪の融寒くや 岩此去 夜雪
初雪より分別のある山を照し重光

初雪よりうねりき江豚の自紙法下五本
初雪やまゝ枝苗の障なくひ山嶽国駐
初雪やゆきを掃除麦 呂水
を法師の類よみ
雪より中流をん
初雪ハ餅りし糖や飴法師逸竹名山
初雪や梅咲 窓より餅乃雪若木
松皮より雪の最るや 雪れ雲山と雲鹿
雪降や窓よりとる雪 灯のあり除風傳信

行蛇り及筋もあり 音佛大坂之惟

音乃日や紙子巻つて頸中を良音京仲

よいんといふ小僧あり秋の音只伯

酒買つあけくる音れ瓢々風使明

中女や髪を又巻りて 音の音碧川

之公不換 世江山

食ふと茶の静なり 音の思山縣同如

音と又て居りまをまの富貴上有知柳方

火乃端へおくる来てまの神の音加治田其由

秋恙をむきり落たり毎の音全円牙

旅り居ふころを 音れ日音全丹芝

鶏や火桶いさめり 音の音丁音千声

夜一夜り山の形又ん寂の音全捨石

う川くう音葉むくまや々全録者一秀

月影を抱くころふや音ま全け尚綱

炭夢や音り又の指乃は張全

此座賣りかき川てありく市此言一牛
田樂すくさくひ付たり市の言利直
言乃江ふあききき塔乃新ナコヤ審言
月夜の目小隙もや紀言足成上有去る
足跡ハ二玉も出てやと影の言黒梅
子水場へつま立移くや今影の言鳥吹
掃よせとく年とくせとや門の言月夜
さし波や言もきまらぬかいつあり情を魯丸

法樂

ヒナリキ感節より夜の言とや言の花角足
移り此移り雀や言此舞箕子
雀唱言移竹乃日言差山子江月
取嵐の命もろひや言の竹山嶽山里
又く居神ハ山ハ言あり茶の庭全敷四ト
松榮や内も言降焼差山不くり昨非
秋の言猫を相お手に庭洒れ舟岡

香降や客より自慢の大根汁一筋
納豆の苞も小豆や 香を尺齋の吟
あつた人の勝と客より
やましととりを数か数も
この茅屋より他處し

筋久の法えは香乃かり 松木因
ふちや豆腐も納ふ 飯の香許六

十月

香坂てり遠々り 初時西訊亦
ちき神行香の時ぬりしめお李水
初しくきとの大名う 朝疾好角呂
降くして表ははく時ぬり家聖披
紫れうや時ぬりぬのをれ減文州
千種の前めきく行時ぬり李由

編笠乃盗人々を記時多々、ナカ如正表
吹まらん木の葉押ゆる時多々全畔石
田繩手や月乃供を託言時多々大汁孤竹
急位法師のふあつき初時多々
多といふふれん籠りく
時多々川をせや流く岸の月支考
今市の市日やいへる時多々許古
雲のそそりあてきく岩崎神多々月丸露
おむきに推をせ座や神送如多如山

隣よの世と捨く壺十枚越中荒麦
湯豆腐り十夜の紙や寄れと集十
猪乃鼻に荒麦を蒸菜稀織小泉
象代家りもなま高菜小麟足
大根引曾や在所乃汁の具五束
木枯を踏あへてや大根引太田友佐
麦貯り浪人志る柴山子角呂
麦貯り備くろきく山ねろし集十

霜月

むよ多此は菊さけく多き一を後聖翁
よの中をも一公儀やぬきさく十中杜旭
獨登をみきこ立大坂前川
包狹むく終くき一赤裸夾始
唇乃亀又瓦や枯 蕨 仙角
淋一と浅とくちろけく枯野集十

霜月乃中より建ふや高此房 菊是
川風やきき多はふ空乃月 桃元
新法師もかいて高此月尺知多燕説
踏くや池く氷のいなむ十中重
俎板りきけの杜味噌乃氷系善山石梯
雲空一よ仙けり片笑杜氏り俊魯
水仙の白く豆腐ハきりな支考
照渡る日も空一よ仙花特屈如朴

汲立の水母白ひや多 仙花 星
 を神くろいふゝ無常の神と記 支考
 瓢粟より耐絵せぬこゝ神扣 トコ 一碎
 瓢粟にこそきあゝ酒を神考き集十
 行鴨乃天然裸や 山石後 竹鼻 夕湖
 片浪や里こりき 歌ふ小水の音 独卜

臘月

又々々星之尾縁乃火燧々那 東椎
 餅搗り 伯父くふきゝ火燧々 只泊
 餅搗とあて母志々皆る嵐外 正徳
 粟て志々餅花又せん 女帝花 芦文
 餅をり海乃くそりや娘の子 角巨
 節季作乃初ハ米搗笑ひ 中嶽 残唄

柳弓乃窓や師走此梅の花中夜只快只
楠々素肌をえくや冬乃梅の吟

六神奉納

花折る神々綿あり冬此毒支考
燥掃の片あるちう梅乃を琴た
鷄を奇た多系小疾くや燥拂ト志
吾の花見くや年暮れやうお々嘆凡
年とくや尺とり虫の梢くれ雲川

秋之部

月

雲一重幕み志ありて奉此月支考
乃泉人の口より智ある一巻此月角只
新田や家まの志を山峯此月芦文
秋波儀や庫裏へ此月此月此月泊

三月寺や海より月のおきある風
原もあへ一里余方此 池乃月舟芝
汐のさな次才より言 管此月大計細石
穂為代思く月乃出くけり 雨初

粒安始難を花のあかりはれりかうて
片ふ里のうり麻丁を一節の情もささき

盆り影く川くや 春乃月算十
茶をさふ内儀も出くや梅の月梅子
曙所 疾ころふ心や盆乃月善山柳水

酒をもや茶後枝 蟻や窓乃月舟間
榴小ありぬく月足る 穴窓を楡方

月夜

征せし夜宿い川く燈雪の月夜葉凡
舟り疾て虫此音達し志く月夜一牛
垣根く川原をうて月夜子 枕遠
裏門へおとら此也家月夜く孔 畏虫
飛竹く那の形カタいろふ月夜うな 利直

累人り登ぬう種堂弘月新六段舎羅

名月

名月乃月うちいさや草の花越中浪化

名月うおちうへむけ日向草 湖雀

名月乃の和里 階子や柳の枝東推

名月乃まのけめきむり大坂如凡

名月やむな紀里水 茅白け捨石

名月や淡手根舞世帯新 露川

名月や苗の流社のさくら 波聖坡

名月よ帆けくあそいし 貝夕湖

名月やむと向ぬし 流くぬり枕 吏明

名月うし似々 顔もれさあ衆三権

名月や文けの野古れ鐘と出ん 元薩

名月や隣へ新も 旅心一三女

名月やあぬいて申 唐 幸 独ト

十六夜乃雲や雀の度入るま 全

中六歌の月もぬ種くや々然の表上有た角中
々々の月吹志川ぬら波乃上除凡
何もぬ南天半年ふの月電鹿
能乃子れ喰こりきりりふの月本因

後月

九月十三夜

雨降る

ぬきてよき花何く後乃月支考
本寺乃葡萄も月此名跡名訊竹

七月

是て美る裾の蒲団や今秋の秋許古
深爪り凡乃ささるや今秋の殊本因

武の具角々孫古臣表
志律凡表といひんもこの
関於さぬこなるよ

葉秋りち海散る飛治の拍子支考
そ種を賣し茄子れ蓋の萩乃む乃次

朝露や砂もも やせん 萩乃花可吟
茶の子喰ふ家う味噌とや萩のむ二竹
蝶くゝ今にそりほく萩乃む そ後 投推
凡雲此ちき移く来るや岸の萩 全 快也

廣瀬氏の別墅を萩山
とよ又い雲山といり

萩乃のゆる 中乃下のい木乃山々 惟然
赤米によこたけり 雞 頭む 芦文
女子れよくもを川や 雞 頭む 別系 指集

磯娘う 萩とかささやうのこ百合 赤推
似埤乃初とを 星むくえ ナヨ 孤川
於鳥やまゝ 七夕乃みも来れり
七夕や平仲、子持寺ありり 許六
聖具乃土産浅乃く鳥ヶ那 逸竹
屋ヨクや出寄りて行 おとこ 如朴
赤い産をあげぬる瓜や魂系 杜旭
炊籠りー 涙ハ白ー 萩乃家魯丸

蓬生り浪人きのみ灯籠子勝
夕立のくさけや秋れこぬる^里里勝

神法樂

及りこや神法の秋をみこ^{大垣}草履^以刊口
瓢瓠乃先く花咲^抄新里^抄木^抄
とこやらに^有おもし^有瓢瓠^有芦文
える人^有り^有瓢瓠^有木^有え^有る^有あ^有く^有か^有桃遠
片瓦根乃木^有榎^有咲^有たり^有煙出^有大州

焚茶^有り^有梧乃^有一^有系^有や^有新^有あ^有る^有ひ^有岩^有丸^有あ
稻書^有よ^有と^有終^有て^有そ^有新^有咲^有梧^有梧^有れ^有岩^有丸^有あ
昼^有る^有よ^有れ^有と^有り^有と^有ぬ^有け^有る^有梧^有梧^有れ^有岩^有丸^有あ
な^有る^有き^有新^有館^有乃^有新^有系^有や^有焚^有の^有む^有梅^有扇
牛^有の^有尾^有も^有静^有り^有成^有り^有種^有葉^有の^有楡^有方
庚^有辛^有行^有よ^有柳^有に^有鞠^有の^有汁^有支^有考
む^有川^有う^有り^有と^有一^有役^有ま^有る^有や^有庚^有う^有じ^有芦^有丈
草^有花^有や^有回^有り^有畑^有あ^有る^有ぬ^有あ^有る^有た^有る^有の^有柴

箴別

焚茶の日向種や淡き稲乃を圓如
心貝吹早稲乃積つや新穂鼠穂麥牙
早稲の香や天目おせ此夕新独卜
山むと川鳴き〜くりく川とむ〜葉凡
むん〜とあておと〜ろきとん不引只泊
稲妻あり〜と〜とあつる長崎慮く乳一介
稲妻やぬ種も〜る毎の上浪化

八月

ところろ人集を〜せ〜お撲水 汶村
小お撲り〜小侯〜〜小蝶爪 東推
お撲場へ戻種ハ空の尻娘乳千山
機發の山慮を〜やう子
人乃方と見やう〜
お撲足の推踏 くらり 揃う取木周
稲の香此火新と〜〜菽女の布唐柳江

湖も荊田かまへのふらりうま聖萩
むよちや捨見の先を唱へ新 森川
何より浅葉ふよみ告る百舌声 素徒
山雀の胡桃やこころん 岩のま如碓
古凡の能階師より
や片かりんとして
海り多層こりふ名れ まさり子 角呂
餌をむらふちも見え 次鮎 鶴 集十
新居まれば家を出る 小舟山嶽 麦波

物乃とく様と村の蔭 々那 越中 呂凡
化手分れ製茶の場や花をく 紀 西念 千翠
城外の湯を訪んとし
人一人一柄を携へり
宿の将の客と見えん 花を交 支考
朝嵐麻 追ちく尾花く 孔 細石
糸鞆乃 蒔絵く 似くく 山石 行藏 是柳
けとく物ぶりや 山石乃 菊 芦文
葦竹や 尾との 鐘の 日暮まで 均所

葦結りちをそ尺也まやどころ乃山梅子
 葦狩や先り立せる天窓 役東鵬
 穂蔭に免かく目こく木の子結 若山 季素
 葦狩やさひ也戸 是 西坊去留
 腰探る扇乃癖や 秋乃風如山 知多
 田を寄とる 墾れりそらや秋の風千夾 ナヤ
 底のほく指くや 秋乃風 桃先 三及
 吹被てや山りそらつく秋の香 箕十

九月

官立乃屋根のまひや葉の花 露川
 菊島先へさくむハ亭まらう暇 正秀
 いろくは葉や望田乃系圖持 許六
 菊畑や五歩七道の勢そら 尻夕 上有知
 灰汁糟の拵場く葉の常ハ 山嶽 海融
 我修み 那をそ 咲みく凡 野菊ハ 五眼 松吹

重陽

今宵ハ九月九日のめくとき一巻を
あ〜んと予ハ九成堂に居り菊あり
一杯の真を催も舞ハ撰集の子
さ〜めり〜九乃影をとさうて九日此
菊にむさふハ十日ハ菊の物ふ
〜ら〜ん〜ら〜九の字こそめて多け
きとて倒めう盃とあ〜神を慈童
うか〜ら〜ま〜〜との〜山路の

菊のそねと謡ひつききりあ〜めて
〜〜尉殿乃新ま〜〜とんと神祇の
一曲とこそ

神祇

さ〜ゆふの日影や菊にみ〜色味 角呂

釋教

茶此戸や仏なり乃菊の花 芦文

窓

思寂の壁より耳あり葉の花集十

無常

葉のなれ秋よりさるる娘多雨泣

述懐

世の中と我を秋より葉の花枕を

懐旧

後京の栞れ花う葉乃花只白

旅

志々箸やねとひまら宿の葉一牛

名所

白黒の溪や月夜乃菊の花五本

笑

撰集の花と咲せん宿に葉支考

千秋

美葉

居繕り及くみわの柚味噌は 枕を
 全屏の中に柚味噌の目り合 角呂
 俎板母客あゝゝゝ柚味噌は 琴た
 内よりと 彦成歌げの 柚味噌は 善山 昨非
 約柳乃俤子日新子 大州
 青月一 新いともきぬ 熟板は 聖披
 雲あめ 陰落ゝゝゝ 熟柳は 弥之
 魂と鳥乃入ゝゝ 紫山子 老お 系自

去凡う 浮世をさす ぬ 紫山子 老お 系自
 喚 稻荊中に 紫山子 昼夜 以嶽 枝を
 こ日月に ありきや 麻のきく 筑紫 さまぬ 沙的
 夕和り 麻の首を 塚小 去 全 水珮
 まゝゝゝと ぬ 終ゝゝ 麻は 夕日 許 云
 麻の目乃 終日 む ゝ 取 系 以 李由
 歩入ゝ 橋張 めゝ 塚 ナコヤ 池柳
 舟拍子 舟 塚を 舟 け 舟 取 舟 系 舟 柳石

あ 凡名を恋しき里のまゝぬこ京 花字
ま乃穂浅ちうくにきく 穂 畔 丁阜
まうくも 唱うの行燈よ 折んせん 支考

蓑刈

さ宮や 棧織 させりまうくく 五本
うう 折う 江湖 足音ん 山の芋 関如
秋もくや 沼地 元さ 柳 五葉 一秀
推の本れ きとさあそり 秋の音 去来

春之歌

花

む乃山 鐘や 五合う 少くも 夢 本因
お手あ の 蓑刈 付さくも 足ん 子 芦文
壺 鷹ハ ぶらの 春を 花 足ん 乳 露川
散を やい つき 尾より 裾の 先 箕十

唐下

三

水無り吹込花乃ち亦多
散むのりともりさめ其書葉ふふ
散花母麻の子もろく居る
未後

凡雅の友進あつち平松平の夕合
帆うけ帆をばうめ持

まうくもやあうまうせし小雲越
訊竹
まうく又て花ふ合志のいこもく
天
花紙又糸糸の延やかいつり
重麻
むちも茶を換まればり
除凡

あつちも酒なめくく花乃
陰凡四
あつちも花を散まや
陰の僧
あつち
あの花ををらふ見をぬ書院代
雨
寂冥れ門あり里ハ花さかり
二竹
忙蜂の行拂や花の種をき
円牙
り灯に日ハ香く
丹芝
山うけ乃花の歩旅や
芝居
其由
皇ぬ人むれ
乃新の報舟圖

花の陰より花よりてや瘦法師如朴
散むとのせきく枝や解姫の甲系起
山船や志向り足きい城乃花乞柳
毛纏て蓮子の言似も花尺び五本

浮世の勅も一酔しり
おとしりさきとさき

花巻 編笠ひうう 袴うれ 三佳
谷まゝもまを履ねとあ種ハ花尺 独ト
むるういさあきく枝や益度ハ 吏明

花を此くくろハ志らんとうけ 嘆凡
口癖ハ 唱う馬の花くそり 去る
川舟ハ茶をいへんん茶のむ 素墨
肉ハ飛花や舟ハ乃をたき色 赤膽
花の時船渡ハな〜 岸のさ 一牛
むくろま山ハ新あり田ハ出ふら 後昔
白妙や花う〜をハ踏ハ乃群 只泊

梅

九年母の耳ととととと梅う那
山梅りつけあおの星 陰う角呂
人形乃笠とく足あげよ山さく支考
山多れぬりし時一山あさ可吟

十三

正月

雪や梅をそふ神くそあるき 芦文
雪よくかり出く毒中 蘇 箕子
雪乃利奈足透くや一草 菽 光俊
雪やよ川あうくく川く 紀 木因
うさひまの草と根ふく川 嘉永 聖子

十五

うくひまの糸く 釣く糸 扣き外 支方
 うくひまの糸を 足りけく 扣き外 管年
 うくひまや 片 際あけて 菽つまき 同如
 管れ乱や 聖竹 桑此 本原 凡必
 うくひまの糸に 似あわさ 柳 此 鱗是
此の糸と押合ぬ人ありと
小盆の糸と通しとまう種ぬるなり
 管乃 けくくを 耳く 終下 屋敷 角呂
 管と 枕 あハセの 二階 ぐ卵 均水

名所管

うくひまの糸海尺く 写や 浪戸の里 卯七
 管乃 終日 予川 吾や 吾乃 乃 庭 去来
 管れ 志まう ぬ 声や 汐く せり の 楽
 うくひまや 持く 毛く いて 玉あれ 吾乃
 管ハ 茶 漬り 疲る 男 久 此 柳方
長少 細く ういひ せんも
れふ さくさく せし おも せし
 管も 疾 果て 後や 膨 月 仕 帆
肥後 徳平

雪り 袂ももや 青 藤 好 一 三 女
竹 まるく 香 此 癖 あり 毒 の 花 只 泊
咲 けく な ぬ 外 梅 の 香 さ 小 東 起
咲 中 さ け 小 腰 梅 乃 を 沙 明
咲 色 咲 散 も 散 る 毒 の 花 李 春
志 梅 も 散 や 暮 打 の 風 走 前 川

本因亭

神 下 某 人 宿 入 江 此 梅 の 花 支 考

守 式 乃 烏 帽 子 附 梅 の 花 丸 露
梅 香 乃 鼻 の あい 香 氣 乃 普 石
大 名 乃 か き 出 さ れ 乃 梅 の 花 柳 江
梅 香 此 袋 あり 乃 於 日 乃 国 雅
七 種 乃 扣 さ 乃 梅 の 花 李 水
七 種 の 次 や 蓮 乃 乃 乃 種 毒 一 勇
大 名 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 一 介
下 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 安 世

乃美也やあゝめやふ山花 赤川
おとろき海をたふや傍 炭魂人 下笠
あゝ魚や精を付りまゝり 角呂
あゝ息を二をい梅敷る 日影如碇
第一分と何と眠るや 猫乃志 旦栖
何あゝぬ言ともいまん 梅の志 夕湖
出良父入や甥の机り 立く上 上るか 黙不

二月

中よりむもふとんて 燕 角足
御坊のあゝはかまゝり 燕 耶 長旅 策非
新友小言 陣あをん 菜畑多 枕遠
大根のかゝみぬけてやまの香一香
踊笠もまゝ蝶くさ記 彼居子 赤川
出るまゝやむぬり 伸り 耶 山泉

切芝や山く見お依凡 苗代田 孝吉
菜花むや尾お構構のれく 烟たき 和泉

旅行

菜花むも砂うくこり行てあさけ川 箕十
笠笠の伊達を揚田の田打くぬ 孤川
まゆゆり様子の下れ火種神子神 卜色
藤の羽のまうきんや小ぬう雨 角呂
静さの歳くく 如胡 藤藤 拙を

さう波や維子の脛脛越 畦はくま 箕十
四又本乃松を小橋り維乃声三列 白吉
兼ふの上に日いてくつきそ 橋ふ 鶴白
谷川や橋ふくく 猿乃く急 雲松

ある人同様の
お徳ありし成

吹志川くまうハ門田此 陸陸子陸 梅五
牛の尾ミ目カはくく おくくく 陸陸子陸 水石
水尾谷ミくカくくく 終て 陸陸子陸 李由

三月

いよいよ桃の花もや雛の鳥
次の子らも雛あり女中室 茶雅
春令に光るや雛の雛もさう 茶後
雛連の疾火もいづぬや青まゝ 麦牙
一所乃宮と成や 毛乃花 交林
桃の花より眠ふ胡蝶は膝枕 廣昌
下村氏

あり神りのせしめありや鶴合 茶文
この風よりよやいあけん 紙三列一折
里の子や舞つて雛も斗いりの母りト志

上戸の強ひねとこのこ
か限との麦合吟
かゝもむり此人の隣の草花と
こそやいも終つとき

紙考 腸強さるる野 良の正務
陽そやらまけておふ海乃上卯七
かけろや春の煙乃 縁もあり 桃先

かけろおの根を打起を留るか
陽春の雲や火押のかさりもの
唐白乃やり春ありおる月
おる月若の紙やこ日の月
たの—さま雲のあけく此勝月

旅行

鶴と月も勝乃萩のう都
海棠の児此唇ほろみたり一介

かまふうりとうへてころふ柳山 江鶴
若柳や明行春の海やけ 吾仲
川よせて竹よ咲たり 若乃花 勝不

けさいなたり—合割院とや
むり宗祇は師の園哉くまも
若しらのこさう外としむんたの白飯
の花れゆりもけ庭の風流とそまけり

若乃花瘦く白交い〜やほし 支考
山吹のさ〜被白り 垣乃外 凹山
落る時一葉もあふ〜 麻の角 露石

書下

そは比ハ瓶ももけく茶摘ハ友純
り去や新茶の白ハ萱屋所 松星
行春に菊出くもく梅系 仙角
行去り退ぬりきく旅疾ハ文州

復之節

郭公

友ハや梅の花 郭公 公 篁十
あをくせり唱う梅ハ郭公 九次

むさくあはらうある
人の方りあつたんとて

侍といふ字ハ旅人と云くさる 支考

郭公侍てよ草鞋をまくあらしぬ凡
起くい漢もみ裡や月もさる捨石
あり種ふおとくろいのう郭公天香
郭公侍人ありや峯乃塔氷全
均あり母を
いひひ
それ若の氣いそくわくまに同如
卯のむう田舎うせ紀や郭公小嶽毛筆
幕色にむうのそ向くや郭公角足

四月

卯の花や洗ひえく影自小袖李由
卯の花や痔瘻病乃志こ紀常丹登
卯花むの本陰は法一郭の食肥後佐原横夷
うれむうとの種まふう昼狐一介
卯の花やるれ後ミルう立むう角足

卯日の影いさううり
卯日の影いさううり
卯日の影いさううり

夕のむと海乃望りや都態山 去来
 灌仏や世いづれむ乃わとくきん 支考
 灌仏よりと都郊の花は日の出に 高推
 格乃美を神のかさや更衣 素後
 垢籠とくく小石はうへや更衣 松屋
 惟子れきとあまきく屏風は 踏小
 小川りと持ていあ美ふに 踏小
 粘けて足度日和のあまふは 踏小
 踏小
 踏小

月影を京りきくはあまふふ 杜旭
 家まのきく借屋乃牡丹畑 藤川
 籠さく入ぬ年のあまふふ 藤川
 一輪の神女をあまふ 牡丹小 支考
 都洒く酔はせく屋を牡丹小 支考
 于細く風をくまふや芥子れむ 琴た
 毛羽をとたのむちくくや芥子のむ 元純
 里へまよる声のひきくや芥子れむ 朱連
 朱連

踏小
 七三

雨後即自

昼寝やあ竹そよぐ山ほくし 大竹
竹の子はあ志の齋や 角の念 徐宣
亦あ子をた くりあうと船の市 芦文
竹乃子あ 一歌うき 垣のき 如丹

五月

家新くさいく 逢て田横は 夕湖
杖法いそ晴み ちこと田 植は 砂金
去風小昼寝 げんの田 歌は 眠月
湯衣すそ田の草 ともや 鶴のき 一柳
涼風ハネ 紙後や 田草 とり 乞柳
あけり 物をちやて 田草より 思柳

子乙女の筆よりさうりり落れ羽に鶴
蓮花あうり風志のまうて管う肌仙角
管尺の橋うり出さるる屋ささか小地を
管尺や橋をなうりてあかみ万小僧
八年の春特うり竹や栂乃花路小
乃ん此うりあうりり栂の花角呂
柚の花此あいをけん栂乃花かき布
麦此種をもあうり終るる此粟のむ細石

麦の穂や毛食乃薪一かけ均水
鈴風うり梶よりなうりん熾う孔素木
搥の香をとろふあけさ熾う不窓竹
神唱やねとへん凡乃のりり孔ナリ素探
骨骨に櫓うるの音紙を鈴外夾始
念仏乃るるとさうりさぬあ新水熱田孫家
お月あれさるるもあうりん小僧恵閑
あうりて瓢のうり乃さうりけう好東推

書外

五

遠きまとのききき地乃扇多 角呂
 下野や^花あ子れ傍りおとく^花一^花花文
 破糸の中子も咲や 菱乃花 湖雀
 大のさ^{ナヨキ}に咲けと糸さく^{ナヨキ}一格のむ 水杖
鴉牛の物あるきき浮世より
味をさかんとおもしろ
 長めり家譲りてや 鴉牛 角呂
 空の誰竹枝のわさか^{ナヨキ}つり 大次

六月

小便を^{ナヨキ}してい川くへく^{ナヨキ}椀乃茶 嵐涼
 持ぬく^{ナヨキ}影く^{ナヨキ}飛々^{ナヨキ}野れ声 丈牝
 山蝶を^{ナヨキ}鳴^{ナヨキ}そ^{ナヨキ}ろ^{ナヨキ}も^{ナヨキ}き^{ナヨキ}く^{ナヨキ}春^{ナヨキ}れ^{ナヨキ}風^{ナヨキ} 倫女
 蝶の羽と^{ナヨキ}古^{ナヨキ}ひ^{ナヨキ}く^{ナヨキ}山^{ナヨキ}を^{ナヨキ}秋^{ナヨキ}ち^{ナヨキ}じ^{ナヨキ} 何梁

入峯餞別ニ句

新掛れ涼^{ナヨキ}さ^{ナヨキ}蝶^{ナヨキ}れ^{ナヨキ}衣^{ナヨキ}く^{ナヨキ}那^{ナヨキ}葉^{ナヨキ}凡^{ナヨキ}

別端のきりり日和や蟬のまゝ魯丸
寝くくくや夕の息ありき碎ち一重均水
隣とと暮れ抱きあはるる柳泉大枝
爰うこ根のふき雲のあつさば 范采
餅脍の後脍も暑く朝の山 素説
金持乃脍を暑く涼くれ幸後 枝維
昼食うくたふのふくふ 暑く那千山
石切の月れくさうく 暑くれ 木道寺

城下

呉服屋の足袋かきり暑く木岡
暑くく暑く暑くや庭の合歡のむ 眞十
涼風や抱りけむ 移乃花 巴静
涼風く暑く移乃花の上 一節
大仏の影や涼くさあつ山一こ
夕涼亭に足出さや百八灯光法
裸宵たるよりよかれ涼く孔 晴雲

肩衣いよあ〜涼〜 帆ヶけ舩

小屏風より山里涼〜 腋の上

此の鶴屋の梅かきさる八景の小屏
風よけ白おえ〜 後のととを徒
きよ風流いよあ〜 一生〜 屏風も
屏風、後のととをさる〜 そのがゆ
中世の理屈よ〜 あり〜 あり〜 あり〜
〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
き〜 かと浦山あり〜 あり〜 あり〜
形容いよあ〜 あり〜 あり〜 あり〜

き〜 あり〜 あり〜 の〜 の〜 は〜 度
撰集あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

角長犬

致し碎々湯殿如神八月夜半吾仲
致のあうに松風をき佐わぬ如家
致を火や煙くく勃く天の川吐屑
小石帯の世をゆるぬ乃致を山嶽柏五
致れ喰く四日待たざる旅彦加松
姿見の鏡よりきしその峯聖守
以るあやあらんと見越み雲乃峯一風夕
月涼扇換様のせしちさ地桐井

崇良晒賣や月夜れ念仏あり素均
格子かき古月建く致屋よ月夜半
一礼の海て腰より扇う那
草の香浅風や吹めく七用丁時云
虫なりや月と目とかけて上る履四卜
瓜喰く影も目也皮山枝小
や僧の夕立まらや泉掃除ふ只伯
涼風り傍く強よ心昼寝小全

凌宵やもとり去昼此徑乃声若詩柏舟
川猶や解くさりの所の付宜 全
川狩を柳の結の正此因風
冷麦や河骨さうい 磯乃寺塔や採兼
お川融付融のふり種や冷—麦下村氏 廣林
素越り地産のま—乃清るは 尚改

野瓜

真瓜

私に美味のそありましくより 角呂

糸瓜

花ちりそそ後の名をと居ちぬが 支考

胡瓜

涼、夜ふの肌のあましくさきふは 箕子

越瓜

あろりりい葵りりいやまりりい川柳 芝文

京寺河三系上井筒石之板

昭和十二年九月十九日 校舎

殿日良作氏字在

後子

中子信定

子

松子



